

2025 年度 地域地理科学会賞

受賞者：田中健作 会員（金沢大学人間社会研究域・准教授）

受賞理由：

田中健作会員は交通地理学分野を中心に多数の先駆的な業績を発表しているが、とくに関心を抱いているのは日本の条件不利地域における交通問題である。

このうち離島地域に関しては、瀬戸内海地域を対象として、事業規模の小さな航路の再編・維持について考察した論考（経済地理学年報 56(1)、2010 など）や、人口減少過程における本土近接型離島での住民の交通形成の具体像を明らかにした論考を発表している（豊田工業高等専門学校研究紀要 47、2014）。

中山間地域に関しては、広島県三次市を事例として、コミュニティバスやデマンド型交通の登場により重層的なバス交通サービス供給体制が構築されていく様子を描きつつ（季刊地理学 66(1)、2014）、その山村地域におけるサービス需給上の問題点を指摘している（経済地理学年報 60(3)、2014）。そのほか、中部地方の県境山村地域における県際バス路線運営についての検討（季刊地理学 69(2)、2017）や、徳島県上勝町を事例とした遠隔性の高い地域での高齢女性のモビリティに関する研究（地理科学 75(1)、2020）も行っている。

これらの研究においては、堅実な地域調査に基づく実態把握に加えて、その地域で生じている交通課題に対する具体的な提言がなされている。そのため、田中会員の研究は交通地理学分野における優れた成果であるばかりではなく、地理学的研究が有する強い説得力をもって、学術的な成果を社会に還元しうるものとして重要といえる。

なお、田中会員にはゲートウェイという視点から名古屋大都市圏における交通ネットワークの特質や変化について明らかにした論考（豊田工業高等専門学校研究紀要 50、2018）や、インドの経済発展に伴う農村の変化を捉えた論考（地理科学 66(1)、2011）などがあり、研究関心は日本の条件不利地域の交通問題にとどまらない。本学会の機関誌「地域地理研究」にも、高知市内の河川沿いの住宅地域における地域住民の防災対策（地域地理研究 26(1)、2021）や、ロープウェイの導入やリキシャの EV 化など、インド Varanasi 中心部で生じている交通の変化について報告している（地域地理研究 28(2)、2023）。

このように、田中会員はきわめて精力的に研究活動を展開しており、すでに地理学界において高い評価を得ている研究者であり今後もさらなる研究発展が期待される。また、その著作を通じて、本学会に対しても積極的な貢献がみられる。

以上のことから、田中会員は地域地理科学会賞受賞者にふさわしいと評価された。

選考経過：

金料哲会長より、川田力、高野宏、松多信尚の 3 名が学会賞選考委員に委嘱され、互選により川田委員が委員長に選ばれた。2025 年 3 月 13 日に学会賞選考委員会が開催され、委員から推薦のあった候補者につき検討した結果、全委員一致で田中健作会員を受賞者とすることに決定した。